

EUの再生力「知の共同」——アジアへの示唆

羽場 久美子

(青山学院大学教授、EUSI 設置講座(一橋大学大学院)「EU 論」担当)

世界が、何よりアジアが、EU から最も学べることは、1) 和解、2) 拡大、3) 「知の共同」の三つであろう。さらにもう一つ付け加えるなら、4 番目は危機からの飛翔。常に荒廃と危機の中から、ヨーロッパは再生する。現在の金融危機も、EU は必ずそれを打開するだろう。EU は、ネガティブをポジティブに変えていく力がある。それは戦略の中に哲学、規範的な思想があるからだ。EU を研究する醍醐味もそこにある。

それゆえ、今回、原稿をお引き受けて、その 3 点、特に「知の共同」、そして世界・アジアへの示唆について、考えてみたい。

第 1 点目の、紛争・対立からの「和解」は、今回 EU がノーベル平和賞を受賞した最大の理由、世界・アジアへのメッセージでもある。

ロバート・ケーガンも述べたように、「第 2 次世界大戦までは、ヨーロッパがマルス、アメリカがヴィーナス」であった。

第 2 次世界大戦を思い起こすだけでも、2000 万人の人々が亡くなった。累々たる屍と戦争の荒廃、人々の挫折と絶望の中でヨーロッパは、エネルギーの共存によってよみがえった。おなじみの叙述かもしれないが、未だ止まない中東紛争や、何より尖閣・竹島をめぐる日中韓の対立を考えると、なぜヨーロッパに学べないか、と痛切に思う。

ヨーロッパは、CM で流される『ユーロ、ユーロ』とダンスする平和的共同体イメージを、1 世代、戦後 60 年で作り上げた。すごいことだ。その根幹はやはり、1) エネルギーの共存、2) 国境線の凍結、3) 和解と若者を中心とする草の根交流、の 3 つであろう。この 60 年、アジアでは、ずっと『歴史問題』を引きずってきた。エネルギーの共存と、国境線の凍結の二つを実現するだけで、世界の紛争の殆どは、とりあえず「構造的」には消え去ってしまう。尖閣・竹島でさえそうである。残った心理的なしこりを解決したのが、お互いに殺された親戚や憎しみを抱え込んだ中での「独仏 100 万人交流計画」であった。

かつての敵の中に、第 2 の父母を見出し、敵の言語を互いに話す。彼らが育て新しい共同の世界を作る。究極の戦場からのパラダイスづくりを、独仏はやってのけた。冷戦の分断によって若者の大量交流計画を行えなかったドイツ・ポーランド間は、紛争はなくなったが、心のしこりは今でも残っている。

我々は日中韓で、1) エネルギーの共存 2) 国境線の凍結、3) 若者の交流計画が実現できるだろうか。1)、3) は、3. 11 後、実は進みつつある。問題は 2) の国境の凍結。ここには Political Will、優れた指導者の強力なリーダーシップと、国民の共感と支持が必要である。それはアジアには、まだない。

二つ目は、異なる体制の国々を取り込む拡大である。EU がアメリカを凌ぐ世界一の経済大国・規範的大国になったのは、実は和解・深化・ユーロの実現に加え、「拡大」による。拡大は一方では、グローバル化におけるネオリベラリズム的な競争原理の結果であるが、その結果、90 年代の英独仏は、財政赤字に苦しむユーロペシズムから、2000 年のリスボン宣言に象徴される、アメリカを凌ぐ世界最大の大国、競争と雇用、投資の拡大を

実現した。

全体の 5%しかない経済力が、高度な教育を受けた安い労働力と商品、5 億人の人口を得て、西欧の企業に投資先と市場と活力を与えた。経済的には東ドイツを含めて、半植民地化的的色彩を持っていたことはぬぐえないし、「ダブルスタンダード」への批判もないわけではない。しかし拡大の最大の成果は、分断したヨーロッパを一つに統一したこと、標準化を推し進めたこと、二つのスピード(Two way Europe)ではあれ、「排他的でなく包摂的な欧州」を作り上げたことである。私たちは、排他的でなく包摂的なアジアを創れるだろうか。経済では既にそれは実現されている。しかし、アジアでは政治と安全保障が、道をふさいでいる。もう一度経済に立ち戻って、共同の利益とは何か。を考えてもいい。

3 丁目、近年最も大事だと考えるのは、若者の育成による「知の共同」である。

欧州は、エリートの「nobles obliges」を大切にす。知に心と哲学を吹き込む言葉だ。社会、世界に貢献し、より良い地域を実現するため、知をどう活用するか。たとえ建前であれ、「世界のために自分の能力をいかに使うか」という理念は、若者を動かす。欧州大学研究所や欧州大学院は、かつての「独仏若者 100 万人交流計画」を現在に実践する豊かな場である。異なる国籍と言語文化を持つ若者たちがディプロマを取るまで共に学び、親友を作り、帰った祖国でリーダーとなる。戻って政策を実現するとき、ヨーロッパ中に、共に学んだ友人が政治経済を運営している。

高度な教育力を持つ日本は、歴史的過去の困難さから 1)2)の実現はなかなか触手が動かないかもしれないが、3)若者の知的交流のセンターになることはできる。

EUIJ は、その最先端で、知の共同を作っている場ではないか。私見では、EUIJ をもう少しアジアに開く、そして日本国内では、排他的ではなく包摂的に共同で、エラスムスを導入し世界に開かれた EUIJ を作っていく。これは今すぐにも実現できる、日本の技術力・教育力ではないか。

反目のアジアを、知を突破口にして、若者の共同のアジア、開かれたアジアにしていく。これはおそらく、強力な政治的意思がなくても、日本の大学の知の力で実現できる。欧州と共に、EUIJ がアジアの知のセンターとなっていくこと、そこから育った若者が、知の共同を推進していくことを、心から望みたい。アジアの再生はおそらく、知の組織化によって始まると考えるからである。